

実践的認識について

——聖トマスとドゥッス・スコトゥスの比較研究——

八 木 雄 二

はじめに

啓示神学は実践学であると規定するドゥッス・スコトゥス(1265—1308)は、実践的認識(cognitio practica)について精密な考察を行なっている⁽¹⁾。われわれはこの論稿において、スコトゥスによる考察を手掛かりに聖トマスとドゥッス・スコトゥスの比較を試みようと思う。

しかしこの主題においても比較研究には多くの困難がある。たとえば両者がこの問題に接近する仕方に相異があって、一方が精密に論じていることを他方がほとんど論究していないことがある。そこで次善の策としてわれわれは簡単な予備的考察を行なって比較のための要点を見つけ、それにもとづいて個々の内容の比較を試みることにする⁽²⁾。

予備的考察

さて、われわれが主題にするものが「認識」である以上、われわれはそれを荷なう「知性」に目を向けておく必要がある。ところで、「認識」は知性が「所有するもの」であり、両者は決して同一視されてはならない。たとえば、「実践的認識」と「実践的知性」は同一のものではない。何故このことが重要であるかという、以下の考察で示されるように、「認識」が実践的である故に「知性」が実践的であるのか、それとも、「知性」が実践的である故に「認識」が実践的であるのか、という問題がトマスとスコトゥスの間に横たわっているからである。

次に、「実践」と「実践的認識」との区別も重要である。「実践」を「選択的な行為」とすれば、「実践的認識」は、選択的行為に関わる「認識」であって「行為」

ではない。⁽³⁾したがってたとえその認識が実践的であっても「認識すること」は「選択的に行為すること」ではない。たとえば、或るものを「認識する」ことは「選択的にそれを望む」⁽⁴⁾ことから区別される。

しかし「選択的な行為」は「認識」を先立って必要とする。なぜなら、選択するためには、複数の選択肢が前もって知られていなければならないからである。こうして「選択的な行為」は「認識」から区別されながら、他方でそれを必要とすることは明らかである。

最後に、「選択的な行為」が「認識」を必要とするものであるなら、その行為は知性的側面を分けもつと言える。その意味でその行為は特別に「意志のはたらき」とも呼ばれることは予め承認しておいてよいだろう。

それ故、われわれは以上のように、「知性」、「認識」、「実践ないし選択的行為」⁽⁵⁾（意志のはたらき）を区別し、しかもそれらの間に成り立つ様々な関係に注意を払いながらトマスとスコトッスを比較してゆこうと思う。

(1) 知性について

まず「知性」に関してわれわれは、聖トマスが『神学大全』⁽⁶⁾や『真理論』⁽⁷⁾に、アリストテレスの『靈魂論』第3巻から引用している定式を取り上げようと思う。それは、「実践知性と思弁知性は目的において異なっている」(intellectus practicus differt a speculativo fine)⁽⁸⁾という定式である。

トマスはこの定式を「思弁知性はそのとらえるところのものを行為に秩序づけることなく、ただ真理の考察に秩序づけるのみであるのに対して、そのとらえるところのものを行為に秩序づけるような知性は、実践的と言われる」⁽⁹⁾と解釈している。したがって、この定式で「目的において異なる」と言われているのは、「真理の考察を目指しているだけか、あるいは、行為を目指しているかの違い」の意味である⁽¹⁰⁾と考えられる。

これに対して、スコトッスの考えを見てゆこう。彼はこう言っている。「知性が、所有されるもの〔認識〕⁽¹¹⁾によって実践的と言われないのは不合理であると思われる。なぜなら、所有するものは所有されるもの全体によって、所有されるものの本性に従って名付けられるのであるから」⁽¹²⁾すなわち、知性は、それが所有する認識に

よって実践的と言われたり、思弁的と言われると言うのである。さらに彼は、「対象それ自身こそ、考察それ自身に先行して、所有されるものがそれによって実践的と言われるところの原因である⁽¹³⁾」と述べている。

つまりスコトゥスは、知性は、それが所有する認識によって実践的ないし思弁的性格を与えられ、さらに認識は対象によって実践的ないし思弁的性格を与えられると主張しているのである。もう一箇所引用しよう。「私は、その実践的考察は何によって実践的と言われるのか、と問う。知性によってではない。なぜなら知性それ自体は、実践的、思弁的に対して無差別的であるから。すでに証明済みのように、目的によってでもない。そして同様に、かの考察に先立つ、所有されるものがそれによって実践的と言われる理由となる、別の原因がある。したがって、対象によってである。これが求めていたものである⁽¹⁴⁾」。

スコトゥスがテキストの当該箇所の問題にしているのが、「認識」であって「知性」ではないために、知性に関する彼の主張を読み取るためには推論を経なければならない。しかし、彼は、「知性と行為と所有されるものは同一のものによって実践的と言われる⁽¹⁵⁾」と述べている以上、彼の主張は明らかであると思われる。すなわち、「知性が実践的と言われるのは対象からである」と彼は主張している。

それ故、トマスは「目的」(finis)に、スコトゥスは「対象」(obiectum)に、知性の思弁的・実践的区別の根拠があると主張していると結論される。言い換えると、トマスは、思弁的知性と実践的知性は別々の目的をもつと主張し、スコトゥスは、別々の対象をもつと主張するのである。

次にこの両者の相異の意味を探るために、われわれはスコトゥスがなぜ「目的によってではない」と主張するか、聞いてみることにしよう。

「もし、アヴィセンナの形而上学第6巻に従って、目的が先立つ原因であり、むしろすべての原因の中で第一の原因であって、そのように、目的によって、そうした〔実践的〕傾向がかくかくの本性〔認識内容〕に一致するようにその本性の考察がありうると言われるのなら、反対：目的が原因であるのは、ただそれが、作出するものをして作出せしめるように動かすところの、愛されるもの、ないし望まれるもの、であるかぎりでののである。しかし既述の傾向〔それによって認識が実践的と言われるところの傾向〕は、目的が愛されていようと、また愛されていなくと

も、考察に一致する。なぜなら、既述の認識〔実践的認識〕は、意志がどのように関わっていようと、いなむしろ、たとえ意志が知性に結びついていなくとも、知性(18)の中に在りうるからである」。

明らかにここでスコトッスが述べているのは「認識」に関してであって「知性」に関してではない。したがって、まずこの引用文で言われていることを正しく理解することが必要である。そしてそのためにはスコトッスがテキストの当該箇所を通(19)じて取っている或る立場を知っていなければならない。実は、彼は、「意志」を「知性」から明確に区別し、「意志のはたらき」を「愛するはたらき」という能動的欲求とし、「知性のはたらき」を「認識する」という受動的なはたらきと見る立場を堅持しているのである。すなわち、スコトッスは「実践的認識」を考察するに際して、知性の「認識を得ようとする」欲求を度外視しているのである。彼がそうするのは、知性である思弁的・実践的区別が、すでに述べたように、認識によることを見出したが故に、ことさら「知性」自身のもつ欲求を考慮に入れなくとも「認識」における区別の根拠さえ考慮すればよいことになったからであると思われる。

こうしてスコトッスは、知性のもつ認識欲求を度外視して、知性を、認識するという受動的なはたらきをもつものと限定し、欲求としては、ただ「意志的欲求」のみを考慮する。

さて、意志的欲求は認識を先立って必要とするのであるから、後行する意志のはたらきが先行する認識に実践的性格を与えることなどありえない。このことが先の引用文で言われたのである。

以上の理解をもって引用文のスコトッスの主張部分を読み直し、なぜ彼が思弁的・実践的知性の区別が「目的によるのではない」と主張するのか、その説明を求めよう。

スコトッスは、「目的が原因としてはたらくのは、それが愛されているかぎりである」と主張する。すなわち、目的は愛されることによってはじめて他者を動かす原因となる。ところでスコトッスは知性の認識欲求を度外視する。ということは、知性が対象の認識を手に入れる際の欲求を認めないことなのであるから、当然、その際の目的因の働きを彼は認めない。働いていない原因によって区別が生じると主張するのは明らかに不合理である。こうしてスコトッスは、知性が思弁的と

なるところの原因ばかりか、実践的となるところの原因をも「対象」それ自身に求め、目的には求めないのである。

これに対して、トマスは知性における思弁的・実践的区別の根拠は「目的」にあると主張する。この主張の問題点は、思弁的知性（思弁的にはたらいっている知性）も何らかの目的をもっているか（目的因がはたらいっているか）ということにある。なぜなら、常識的に見て、実践的知性は何らかの行為を目指しているのであるから、それが或る目的をもつことは理解できるが、対象を認識するのみの知性が何らかの目的をもっているかどうか（即ち、欲求をもつかどうか）は、十分に明らかでないからである。ところがしかし、思弁的知性も何らかの目的をもっているものでなければ、思弁的知性と実践的知性は別々の目的によって区別されるとは言えないだろう。

さて、先のスコトッスにおける考察で触れたように、思弁的知性をもつ欲求として考えられるのは、認識欲求をおいて他にない。トマスはそれについて何か言っているか見てみよう。

『神学大全』に次の言葉が見出される。⁽²⁰⁾「それ故、人間は意志の対象のみでなく、他の能力に適合することどもも自然本性的に欲する。たとえば、知性に適合するところの真なるものの認識(cognitio veri)、存在すること(esse)、生きること(vivere)、また他のこの種の自然的生存(consistentia naturalis)に関わることがら、これらすべてが、或る特殊な善として意志の対象の下に含まれている」。

引用されたテキストは、意志の自然本性的なはたらきに触れる部分である。しかし知性が思弁的にはたらいっていると見られる「真なるものの認識」が、やはりこの種の欲求の対象の一つとして挙げられているこの引用文は、トマスが知性の思弁的なはたらきも、実は広い意味での意志のはたらきの下にあると考えていることを、⁽²¹⁾明示している。

それ故、ここで次のように結論しよう。スコトッスは知性の認識欲求を度外視して意志的欲求を知性による認識に後行するものと見なす故に、さらに知性における思弁的・実践的区別を知性が所有する認識によるものと主張するゆえに、その区別の根拠を「対象」に措くのである。

これに対してトマスは、知性の認識欲求を自然本性的な意志のはたらきの一つと

して考慮に入れることによって、行為を目指す実践知性は言うに及ばず、知性が思弁的にはたらく際にも目的因のはたらきがあると考え、両者の区別を目的によるものと主張するのである。

(2) 認識について

次に、「認識」における思弁的・実践的区別の根拠についてトマスとスコトゥスを比較してみよう。

さて、「認識」と「知性」との大きな相異点は、「知性」は欲求をもつと考えられても、「認識」は欲求をもつとは考えられないことである。したがって先の公理「目的は欲求のはたらくところのみはたらく」を適用すれば、認識における実践的・思弁的区別を目的によるものと主張することはできないと言える。すでに述べたように、スコトゥスは認識における思弁的・実践的区別の根拠を「対象」に描いており、この点問題はない。また、認識内容はその対象によって本質的に規定されることは明らかなので、認識は対象によって、本質的に即ち端的に実践的か思弁的に分けられることになる。したがって当然、認識の一種である学問 (scientia) における、思弁学・実践学の区別も端的な分類となる。⁽²²⁾

これに対してトマスの方は、「認識」は、それを所有する「知性」の「姿勢」と無関係ではないと考えているように思われる。⁽²³⁾ すなわち、知性が現実に関与しようとして企てているかどうかということが、それがもっている「認識」の「性格」を規定すると考えているように思われる。少なくとも次の言葉からはそのような印象を強く受ける。「ところで、或る認識が実践的であると言われるのは、行為への秩序づけによる。これには二つの仕方がある。

ときに、現実態において。すなわち、或る行為に現実態において秩序づけられているときである。たとえば、〔作品の〕形を先立って知っている芸術家がそれを質料の内へ導き入れようと企てているときである。そしてその場合、現実態において、実践的認識があり、認識の形相がある。またときに、現実態において行為へ秩序づけられていないが、行為への秩序づけがたしかにありうる、ということがある。たとえば芸術家が作品の形を考案し、行為の仕方を通してそれを知っていながら、行為しようと企てていないときである。〔そのような認識は〕、習性的ないし能

力的に、実践的であって、現実態においてそうでないことは明らかである」⁽²⁴⁾。

さらに次の言葉は決定的である。『『靈魂論』第3巻に言われているように、『実践知性と思弁知性はその目的において異なる』。すなわち、実践知性は行為という目的に秩序づけられているが、思弁知性の目的は真理を考察することである。それ故もしも或る建築家が或る家がいかにして成り立ちうるかを、その考察を行為という目的に秩序づけることなしにただ認識するためにのみ認識するとするならば、それはたとえ行為の対象となりうるものについての考察であるにしても、目的に関して言えば、思弁的考察となるであろう」⁽²⁵⁾。

すなわち、トマスは知性の目的による相異が認識の性格にまで影響を与える、と述べているのである。たしかに、知性が在ってはじめて認識が在るのであるから、知性の性格が、それが所有する認識の性格に相異をもたらすことは納得しがたいことではない（スコトゥスはこれとちょうど反対の見方を取る。すなわち、認識の性格の相異が、それを所有する知性の性格の相異をもたらすと考える）。しかしながら知性の「姿勢」ないし「目的」は、認識自体にとってはあくまでも外的ないし偶性的なものである。したがってその相異は認識の性格に偶性的な相異をもたらしても、決して本質的相異をもたらすことはない。本質的な相異は、認識を本質的に規定する対象によってのみもたらされるはずである。無論トマスもこのことに全く目を向けていないわけではない。というのも彼は、「知られるもの自身のゆえに思弁的である知は、まったく思弁的である」⁽²⁶⁾と、たしかに先の引用に引き続いて述べているからである。しかし、引用の箇所、すなわち『神学大全』1巻14問16項では、思弁的な知についてのみ、対象それ自身からの本質的規定を述べており、「知られるもの自身のゆえに実践的である知」には触れていない。このことは、彼は知の実践的性格は知性の姿勢によって本質的にもたらされると考えているのではないかと、いう疑念を起こさせるのに十分であろう⁽²⁷⁾。しかしトマスも、学問の分類に際してはこうした立場を堅持できずにいる。『ポエティウス、三位一体論注釈』⁽²⁸⁾で彼は次のように言っている。「それ故、対象 (materia) は目的 (finis) に比例するものであるに違いないので⁽²⁹⁾、諸々の実践学の対象は、われわれの行為によって生じさせられる事物でなければならない。こうしてその認識は言わば目的である行為へと秩序づけられることができる。他方、諸々の思弁学の対象は、われわれの行為によって

生じることのない事物でなければならない。それ故その考察は、行為を目的としてそれに秩序づけられることはできない」

この分類は、明らかに対象による端的な分類である。そこでこの分類に従って『神学大全』1巻14問16項；及び『真理論』3問3項に述べられている知 (scientia) ないし認識 (cognitio) の分類を見直してみると、『神学大全』において言われている、「知り方に関して」とか「目的に関して」思弁的である知とは、結局、対象それ自身からすれば、どちらも実践的な知であることが判明するし、『真理論』で言われている、「現実態において」とか「習性的ないし能力的に」実践的である認識とは、やはり対象それ自身からすれば、どちらも実践的認識に相違ないことが分かる。

こうしてみると、トマスは、先の二つの主著の中で、対象にもとづく端的な分類に知性の「姿勢」による偶性的な分類をからめていることが分かる。しかしこのように、本質的規定者である対象の側から実践的認識ないし学問をつねに見ようとする立場を取らずにいると、人は、認識の実践的性格を知性の「姿勢」、すなわち「主観の相異」に帰着させることになりかねない。トマスが、実践的認識ないし学問を、思弁的認識ないし学問に対して二義的な位置に置くことになったのは、存外、このような理由によるのではないかと思われる。

それ故、今日、実践哲学の復権が叫ばれているが、実践学を主観的なことがらと見なさないためには、主観の側の分析よりもその対象についての鋭い考察が何よりも必要であることが知られる。

註

- (1) *Ordinatio*, prologus, pars 5, quaestio 1—2 ; *Lectura*, prologus, pars 4, quaestio 1—2 (*Opera omnia Ioannis Duns Scoti*, ed. Vatican, 1950 ff) 以下略記する。
- (2) ただし基盤となるのはスコトゥスの考察である。したがってこの比較は原則として聖トマスにスコトゥスの光を当てるものである。
- (3) 認識を知的行为と見ることもできるが、そうするなら、行為の中に再び同じ数の区別がもち込まれるだけなので、そのような立場は取らない。
- (4) さらに言えば、認識された或るものが行為の「目的」とされる。そして本来

的に言えば、目的が実践なのではなく、目的に向かう行為が実践なのである。実はこの点、トマスにおいて問題が生ずる可能性があるが、あまりにも煩雑になりかねないのでここでは取り上げないことにする。cf. *Lectura*, prol., p. 4, q. 1—2, n. 149 : *praxis communiter non est finis*,

- (5) 「意志のはたらき」をカッコに入れたのは、聖トマスの場合、註21で述べるように、実践ないし選択的行為よりも広い意味で言われるからである。
- (6) *Sum. theol.*, I, q. 79, a. 11
- (7) *De veri.*, q. 3, a. 3
- (8) *Ibid.* なお、トマスの『靈魂論注釈』にあるラテン訳では、*Intellectus autem qui propter aliquid ratiocinatur, et qui practicus est, differt a speculativo secundum finem.* とある。(3巻10章)
- (9) *Sum. theol.*, I, q. 79, a. 11 : *Nam intellectus speculativus est, qui quod apprehendit, non ordinat ad opus, sed ad solam veritatis considerationem : practicus vero intellectus dicitur, qui hoc quod apprehendit, ordinat ad opus.*
- (10) 註4で触れたように、行為そのものを目的に取ることは問題があるがここでは問題にしない。
- (11) この文脈で ‘habitus’ を ‘cognitio’ と受取ることが許されるのは、スコトゥスが実践的認識についての考察を始める箇所ではっきりとその置換えを示しているからである。*Ord.*, prol., p. 5, q. 1—2, n. 227 : *Ad istas quaestiones solvendas accipio unum generale quod ab omnibus conceditur, scilicet quod habitus practicus aliquo modo extenditur ad praxim. In speciali igitur videndum est : primo, quid praxis sit ad quam dicitur cognitio practica extendi ; secundo, qualiter cognitio practica extenditur ad praxim illam ;*
- (12) *Ord.*, prol., p. 5, q. 1—2, n. 242 : *(Similiter, tunc habitus practicus erit in intellectu speculativo) nec intellectus illo habitu dicitur practicus, quod videtur inconveniens, quia omni habitu denominatur habens secundum naturam habitus.*
- (13) *Ibid.*, n. 259 : *ipsum obiectum est prior causa a qua dicitur habitus practicus quam ipsa consideratio,*
- (14) 註18に述べられている証明。
- (15) *praxis* を *practicus* と読む。
- (16) *Lectura*, prol., p. 4, q. 1—2, n. 151 : *illa consideratio practica, quaero, a quo dicitur practica? Non ab intellectu, quia intellectus de se est indif-*

ferens ad practicum et speculativum ; nec a fine, ut probatum est ; et similiter, esset alia causa prior quare habitus dicitur praxis, quam illa consideratio ; igitur ab obiecto, quod est propositum.

- (17) *Ibid.*, n. 144 : ab eodem intellectus, actus et habitus dicuntur practici,
- (18) *Ord.*, prol., prol., p. 5, q. 1—2, n. 253 : Si dicatur quod finis est causa prior, immo prima inter omnes causas, secundum Avicennam VI *Meta-*physicae, et ita ab ipsa potest esse consideratio talis naturae ut ei conveniat talis aptitudo, contra : finis non est causa nisi in quantum amatus et desideratus movens efficiens ad efficiendum. Sed aptitudo dicta convenit considerationi sive finis sit amatus sive non. Potest enim in intellectu esse dicta cognitio qualitercumque voluntas se habeat, immo si voluntas non esset coniuncta intellectui.
- (19) 註 1 で示した部分
- (20) *Sum. theol.*, I—II, q. 10, a. 1. Unde naturaliter homo vult non solum obiectum voluntatis, sed etiam alia quae conveniunt aliis potentiis : ut cognitionem veri, quae convenit intellectui ; et esse et vivere et alia huiusmodi, quae respiciunt consistentiam naturalem ; quae omnia comprehenduntur sub obiecto voluntatis, sicut quadam particularia bona.
- (21) トマスにおける「意志の自然本性的働き」をいかに解するかは大きな問題であるが、私としては、ここで、人間の *esse* は根源的に知的なものであるとトマスは考えていると解釈している。すなわち、人間存在において最も内奥にあるその *esse* は、人間のもつすべての能力の根源的な始動者であり、それによって人間が生き、認識するところのものであるために、それは根源的に知的なものとして見られ、そしてそれ故に「意志」(自然本性的)と呼ばれうるのである。——これに対してスコトゥスは、このような、自由意志の下にあってその根拠となる自然本性的意志の存在を認めない。
- (22) 無論はじめから明らかであるのではなく、その対象が明らかにされるのに比例して、ということである。
- (23) ここで知性の「姿勢」とは、「何かを目指す姿勢」であり、知性がそのときときにもつ意志(トマスの、広い意味での)を含んでいる。
- (24) *De veri.*, q. 3, a. 3 : Aliqua vero cognitio, practica dicitur ex ordine ad opus : quod contingit dupliciter.

Quandoque in actu : quando scilicet ad aliquod opus actu ordinatur, sicut artifex praeconcepta forma proponit illam in materiam inducere ; et tunc

est actu practica cognitio, et cognitionis forma. Quandoque vero est quidem ordinabilis cognitio ad actum, non tamen actu ordinatur; sicut cum artifex excogitat formam artificii, et scit per modum operandi, non tamen operari intendit; et certum est quod est practica habitu vel virtute, non actu.

- (25) *Sum. theol.*, I, q. 14, a. 16: nam intellectus practicus differt fine a speculativo, sicut dicitur in III De anima. Intellectus enim practicus ordinatur ad finem operationis: finis autem intellectus speculativi est consideratio veritatis. Unde, si quis aedificator consideret qualiter posset fieri aliqua domus, non ordinans ad finem, speculativa consideratio, tamen de re operabili.
- (26) *Ibid.*: Scientia igitur quae est speculativa ratione ipsius rei scitae, est speculativa tantum.
- (27) ただしトマスは既述の箇所では決して或る認識が本質的に実践的であるかどうかを問題にしていないことには注意しなければならない。彼は「現実態において」そうであるかどうかを問題にするのみである。
- (28) *In Boet. De trinitate*, q. 1, a. 1: (Et ideo dicit Philosophus in III De anima quod differunt ad invicem fine, et in II Metaphysicae dicitur quod „finis speculativae est veritas, sed finis operativae scientiae est actio“.) Cum ergo oporteat materiam fini esse proportionatam, oportet practicarum scientiarum materiam esse res illas quae a nostro opere fieri possunt, ut sic earum cognitio in operationem quasi in finem ordinari possit. Specularum vero scientiarum materiam oportet esse res quae a nostro opere non fiunt; unde earum consideratio in operationem ordinari non potest sicut in finem.
- (29) 上註28のカッコに入れた部分から察せられるように、ここでもトマスは実践知性と思弁知性の目的における区別にもまず触れ、これを根拠に学問の分類に進もうとしている。しかしすでに述べたようにここには無理がある。そのために彼はこのような根拠の不明瞭な言葉を差しはさまなければならなかったと思われる。
- (30) *Sum. theol.*, I, q. 14, a. 16: Secundo, quantum ad modum sciendi: ut puta si aedificator consideret domum definiendo et dividendo et considerando universalialia praedicata ipsius. Hoc siquidem est operabilia modo speculativo considerare, et non secundum quod operabilia sunt: operabile enim est aliquid per applicationem formae ad materiam, non per resolu-

tionem compositi in principia universalia formalia. Tertio, quantum ad finem : 以下註25につづく。

(31) 註24

(32) なおトマスの実践的認識は相対主義に陥る危険があるというこの結論は稲垣氏の主張と対立する。氏は、トマス主義こそ倫理的相対主義に対抗するものと主張されている（稲垣良典；実践的認識についての一考察，恒藤先生古稀祝賀記念『法解釈学および法哲学の諸問題』所収。年度不明）。

(33) 以上，この論稿は昭和56年広島大学にて開催された中世哲学会大会にて発表したものに修正を加えたものである。発表では「意志のはたらき」についての両者の比較にまで及んだが，その後，この比較はさらにずっと大きな問題をかかえていることに気づき，今後の課題とすることとした。